

眠る傍ら



風詩

-1-

つたの 菜

明日、臆病なあの人にしてあげること

愛の歌や 心優しい詩って

捜せばさがすほど 見つかる あふれてる。

だけど

あなたに 言ってほしい。

手を握るのが気恥ずかしいなら

背中を軽く叩いてくれるだけでいい。

そして嘘でもいいから こう言って

”大丈夫だよ”

それだけを...

誰

陰口に興じる

簡単に うなづく

誤魔化し笑って許される

いつも 同じ場所にしようとする

あなたは だあれ

側にいなくて 触れていなくても

厳しい言葉の 棘を刺さず

私のために ずぶずぶと

友達だから

風笛

見知らぬ街 見知らぬ風
黄砂舞い 陽が世界を照らす 月が星を散らす

私は 廻る境地の中を 戸惑わずに進める
悲しみを懐かしさに変えて
厳しさを穏やかさに変えて

私という未知（みち）を
一步一步 踏みしめる

句

雲間(くもま)裂き
気高き陽光
降りそそぐ



句

吹かれゆく

紫雲（しうん）仰ぎ見

夕涼み

雨に想う

はらはらと 雨が降る日には

たまに掌で ひと粒を受け止めて

ぽつっと乗った重さが じわりと染み込む感触がくすぐったい

雨がざざと降りだして 傘の無い身体を痛めつけるけど

すべてが 猛る雨粒ばかりじゃないと

僕はもう 教わってる

自分のことが嫌いだから

ちょっと嫌なことがあると投げ出したくなるんだろうなあ

会話した人が少し眉をひそめるだけで不安になるんだろうなあ

へらへら笑っていると舐められる気がする 実際そうだったし

かといって表情なくすと お高く止まっているって囁かれてた

自分のことが可愛かったら

きっと負けずに挑戦して 負けて笑うんだ

きっと 誰に嫌われても 信じられる自分がいれば良いんだ

どうしたら 自分を好きになれるんだろう

自信...?

そうだね、自信が無い。

意思が軟弱な、こいつのことなんて信じられない。

なにか...

やり遂げたいかな。

なにか

簡単なものから初めようか...

逃げ出すほどでもない、投げ出さなくて済むようなこと...

誰に眉をひそめられても 平気であるっていうのは どう？

他の人のことまで考えてる余裕、ないよね

とりあえず

小心者のせいか

人を傷つけないと思ってる自分だけは 信用できるから

それで

近くにいる人とだけでも 近くにいる人だから

笑って過ごせるように できれば

今は 上等かな

笑いたくなるほど ちっちゃな目標で

涙が 出そうだよ

あなたの胸の中にある

壁際で膝を抱えようと 毛布を身体に巻きつけようと

現実はこちらにあるよ

ああ 傷つきやすいのは

其の

天使の心がいけないんだね

でも

欠片だけでも 持っていて

それが他の人を傷つけない誓いになる

あなたの誇りになるから

愛を求めるのは 天使の性

人を許して こだわらず

涙が乾いたら 周りをゆっくり見渡せるのも あなたの特権

忘れないでね

秋の高い空

秋の高い空

今までよりも

もっと高くなった青空

浮かぶ雲はより遠くなって

もう届きそうにない

ひとつの形に留まらずに

悠々と解放される雲...

こころも こうであれと

憧れを抱いた夕刻

陽の光に縁取られた雲は

美しく輝き 喜びを見せた

遠くであっても

こころなら

いくらでも近づけそうだ

残夢：つらいく

何かから逃げ惑う人々
私は
正体が分からないまま
恐怖心に駆られたまま
人波に抵抗もせずに 共に 逃げる

走る先が見えない...この先は 崖
絶望の中、私の周囲の人々は
次々に背中から黒い蝙蝠のような翼を広げて
飛んでいった...

私は 啞然としながらも
私だけに無い翼を嘆く

背後から近づく大きな影の存在に気付いて
崖から飛び降りた

不思議と 恐くなかった

黒い翼なんて

いらなかったから---

鏡 から...

大丈夫 言ってごらん

涙声だって恥ずかしくない

吹き溜まった気持ちを 唇から解き放とうよ

何から言っていていいか 分からない？

うん

こころの整理が出来てなかったね

だんだんとまとまるから 言ってみたらいいよ

それから他の人に言えること 告げてみたら どう

言わなかったら伝わらないよ

君は 人の心が分かるのかな

好奇心なんかない 同情なんてわからない

僕は ただの脆い鏡

君の明るい瞳を

できるだけ多く 映しておきたいんだ

まったりゆったりふんわり

桃の香りに染まった バスルーム。

素肌を慕う

なめらかな湯温が

こころまでしみ込む やすらぎ。

一日の想いは 泡が包み溶かして

シャワーが流してくれる。

そうして

ふんわりと ふかい眠りに。

素敵 だけを 抱いて。

自分らしさ

嬉しいときは 感謝してる

嫌いでも 傷つけない

泣きたかったら 布団かぶってでも大声を出す

こころ

強くないけど

諂（へつ）らってない

句・雨三連

独り泣き 心に降る雨 銀の針

傘透(すか)し 降りそそぐ雨 涙ゆえ

その涙 やがて晴れゆく 梅雨であれ

存在

窓は 陽射しを部屋へ広げ

部屋の壁は 影を作る

空は 七色に変化し

星は 色が混ざった闇の中で光る

時計は 時間の経過を見せ

私は 息づいている

大地の上に或る限り

大気の中に或る者として

それぞれの

意義

手紙

頑張れ と

言われると 泣きたくなる時がある

果てが見えない空間は冷えていて...

手紙の柔らかな重さに 指先を包まれる

何も言われていないのに

涙が あふれる

日々

何処に行くの

お仕事

何故行くの

明日を 買う為に

休息

曇りでも 欠けていても

月は 丸。

君が輝く限り 道は 照らされる。

ゆっくりと おやすみ。

月さえ雲間で眠るのだから。

天の宴

神々に吟味された星々が輝く

闇を突き抜ける 失われた生命達が末期（まつご）

人々は憧れを胸に星々を眺める

生と屍の雑（ま）ざる 壮大なる闇の内が営み

儚き宴 初めと終わりが散りばめられた 宇宙（そら）

愛とも哀とも 人々は味わう

歪（いびつ）な瞳へ

幸せなひとに なにがわかるの

疲れたあなたは そう 侮蔑するけど

私は

諦めなかった

天気模様

空は賢いから

晴れの日も 雨の日も

自分が必要にされてるって知ってる

空は正直だから

気分次第でお天気が変わる

みんなにどれだけ迷惑かけても

空は優しいから

この ころの代わりに

土砂降りの雨を 降らして くれる

先週≠今週

季節の変わりめの休日

朝起きて頭が痛いのが 二日酔いか

それとも 風邪のせいかな はっきりしない

肌寒いのは 気温の低さか

それとも ひとりで眠ったせいかな 比べられない

先週の今日は猫がいて 夢と目覚めを共有していた

それだけは絶対に

それだけは確かだ

胸から喉を絞る感覚が 涙をこらえさせない

ポケットの中のキャンディー

ポケットの中に入れて忘れてたキャンディー

溶け掛かってたのを口に入れる

味が変わってしまったような 妙な苦味

胸の中に仕舞ったまま

見ないふりをしていた夢も そうだった

星々妄想

見上げる銀沙の星々は平等

大地から見える光は 凍え、飢える子らにも等しく映る

悠久を悠然と渡る星々等から見える

我等は ささいな幻想

飽和と乾きが分裂する

我々は 不平等な 夢

紅葉月の旅

砂を噛むような日々を過ごす身に

叫んでも振り払えなかった痛みを舞い戻す 冷えた風

巡り戻った季節を疎ましく感じながらも

山麓目指すこの旅を待ち侘びた

見応えのある場所を宿で訊き

舗装されない砂利道を踏み山道を進む

落ち葉籠る匂いが身体に馴染み

自然が味方する安堵の感覚に包まれる

外山の木々の狭間から蒼空を仰ぎ、周囲を眺めた

目に飛び込んだのは

呑み込み続けた涙

燻（くすぶ）る未練を 燃やし尽くす紅蓮の深山

これが

見たかった——

秋の句

薄雲に うなだれすすき 終焉の

張り詰めた穂に 乾く風鳴る

ふんわりみのむし

太陽の下で広げた毛布は

光をいっぱい吸い込んだ

ほんわり のこり香

ふうわり あたたか

つつまれて

つつみ込まれて

気分は ゆうったありと 舞う ここち

私 もしかしたら

みのむし

太陽の衣につつまれてる今だったら

女王様になれる

子供じみた想像が

幸せに 輪を かけた

おやすみ なさ い

また あ し た

折り鶴

ひと折りに 願い

誠（まこと）を織り込む

羽（はね）を広げた胸に希望がふくらむ

空気のすきまを少しだけ

手を添えてくれるかな

私の指に 指先を合わせて

そう...

それだけで...

ごめんね

涙が

込みあがってきた...

あいにくれる

やすらぎに身を潜めていたっていい

嫌なこと 消えないこと でも終えたこと

ゆっくりと起き上がって

軽やかな風に誘われた歌を口ずさみ

在るが儘の私に訪れた

"逢い"に 心れる